

【報告】

ギリシアにおける博物館教育活動の現状

—「学校」と「博物館」—

(1) 考古学博物館の場合

Educational Activities at Museums in Greece: School and Museum —a Case Study of Archaeological Museums—

谷 水 良 江*

Yoshie TANIMIZU

Abstract

Since Greece was admitted to ICOM in 1983, it has adopted as its principal activity the introduction of the educational programmes at museums. Especially, the birth of the Centre for Educational Programmes (CEP) in 1985 became the practical starting point of the full-scale educational activity at museums in this country, while some other leading museums also have contributed to the museum education by offering good programmes so far. Greece is the country which is rich in the archaeological cultural heritage. It is proved that the archaeological museums have been thought as the cultural identity of the people, and that they consist the greatest number of all kinds of museums. In this article the author will take up several instructive cases of the educational programmes offered in the representative archaeological museums of Greece.

Recently we see another noticeable phenomenon in this country, which I think important: the collaboration between schools and museums. This is the collaborative work carried out by the Ministry of Culture and the Ministry of Education with the initiative of ICOM Hellenic Committee. The movement is gradually evolving into a nation-wide scale, involving the local museums. Looking at our country, in 1990, close ties with school education were pointed out as one of the museum operations from the viewpoint of museum as a social educational institution in the age of life-long education. Although the situations behind of both countries are different, the author thinks that it might be stimulating to consider the Greek case.

はじめに

ギリシアは豊かな文化遺産に恵まれた世界でも有数の遺跡大国であり、世界中から多くの観光客が訪れにやってくる。しかしながらそれらの遺跡でこの国の子供達のために様々な教育プログラムが行なわれていることはあまり知られていない。歴史文化遺

産である遺跡、あるいは博物館に展示されている出土品は子供達にとっては貴重な歴史教育の場となり教材となる。本稿ではギリシアの遺跡や博物館でどのような教育プログラムが実際に行なわれているのかを具体的に紹介しつつ、この国の博物館教育活動の現状と特徴について述べてみたい。

* アテネ大学大学院、ギリシア
(University of Athens, Greece)

平成11年7月14日受理

1. 学校教育と考古学博物館

ギリシアでは1983年のICOMへの遅い加入にもかかわらず、以来博物館における教育プログラムの開始を一つの基本的な活動の主軸にすえ、教育プログラムの作制、教育者への教育セミナーやトレーニング、教育関係者の会合の開催など様々な努力を行っているが、特にこの国の博物館教育活動が「学校」と「博物館」との連携のもとに行われているということは注目すべきであろう。我が国でも生涯学習時代を反映して博物館が社会教育施設としての機能をさらに充実させていくことが期待されるようになり、1990年にはその運営の方法の一つに「学校教育との関係の緊密化」が挙げられたが、ギリシアにおいてはすでに1980年代後半から博物館を管轄する文化省と学校を管轄する教育省とが手を取り合い、ICOMの協力を得ながら三者一体となって活動が進められてきた。具体的には学校カリキュラムの中で博物館及び遺跡訪問を奨励し、博物館側は学校のカリキュラムを考慮した上で教育プログラムを作制実施するということが行なわれている。

ギリシアにおける小学校の歴史授業のカリキュラムでは4年間のうち、先史時代にまで遡る古代史に2年半（3、4、5学年前半）が費やされる。考古学資料に関連した歴史の学習は小学校3年生から4年生まで続き、その後も古代史は再度中学1年と高校1年で詳細に取り上げられる。高校ではギリシアの歴史に関連する範囲でのみヨーロッパの歴史を学習するようになるものの、やはり小中高と一貫して国史に重点が置かれたカリキュラムとなっている⁽¹⁾。こうした学校カリキュラムとの関連から、考古学博物館において立案企画されるプログラムには特に授業で初めて古代史を学ぶ小学校3、4年の学年を対象としたものが多く見受けられる。

さて、現在では学校教育と結び付いて展開されている博物館教育活動もこのような形をとるまでには1世紀半以上もの歳月を要し、その道のりは決して平坦なものではなかった。この国において最初の考古学博物館が創設されたのは、トルコからの独立戦争期（1821-1830）に遡る1829年のことであり、新生ギリシア国家初代大統領に就任したカポディストゥリアス（Ioannis Antonios Kapodistrias：1776-1831）によって教育文化政策の一貫として取り組

まれたものであった。ギリシア国内の古典古代文化遺産が「ギリシア」という国のアイデンティティーとして意識され、現代ギリシア国民はその輝かしい遺産を受け継ぐ直系の子孫であるという観念はすでに民族独立革命以前から西ヨーロッパ等の国外に住むギリシア人有識者らによって高揚されてきたが、長きにわたったトルコ支配から真に独立脱却を目指すにあたり民族再建のために新生『ギリシア』国家の象徴である古代文化遺産を収集・保管し展示した初の博物館の創設は精神的に大きな意義を持ったものと思われる。

アテネ郊外のピレウス港（Pireas）から南西へ約30 km離れたエギナ（Egina）島の孤児院の一室に設置されたこの最初の「国立博物館」はわずか一部屋の空間にエギナ島の考古学出土品、その他の地方からの出土品が収められるとともに、最初の「国立図書館」である蔵書コレクションと貨幣博物館の淵原となった貨幣の小コレクションとが併設され、「収集」「保管」活動の先駆けとなった。新生ギリシア国家が誕生してまず最優先の課題は、打続いた戦争による文化財への被害の対処とともに盗掘されつづけてきた古代遺物の収集・保管であったし、その後各地で行なわれ始めた精力的な発掘作業に伴って地方に博物館が建設されるようになると今度は増大する出土品の収納の問題を抱えるようになり、教育部門は長年の間着手することのできない贅沢なものであった。「収集」「保管」中心の流れはこのように依然として続いたのである。

2. 文化省教育プログラムセンターの設立

転換期を迎えたのは1980年代に入ってからであった。ギリシアが1983年にICOMに加入したこともあり、国の豊かな古代文化遺産に対して「民族の文化アイデンティティーの原点」としての認識を政府が明確に表明し、国の考古学上の富の保護と促進に関して多方面にわたる方針を採用することを決定したのである。この方針は基本的に次のことを目的とした。1）歴史的記憶の喚起、2）審美的教育、3）市民に文化遺産の保護の問題を意識させる。古代遺物の保護と促進を単なる博物館の一活動としてではなく、国全体として取り組むべき姿勢として位置づけたのである。

この方針の主軸の一つに考古学博物館と遺跡における教育プログラムの編成があった。文化省と国立美術館、そしてフランス文化活動サービスの協力によって行なわれた教育展示「文字の誕生」はこれから教育プログラムの出発点となった。この展示は1985年に開始され、それは折しもアテネがヨーロッパの文化首都として宣言された年であったが、その後すぐに文化省の教育プログラムチームが政府の命令にて発足された。このチームの目的は各管理部(Ephora-te)において教育プログラム施行にあたっての適当な場所と可能な人的スタッフがあるかどうかを調査し、教育プログラムが編成できる可能性を探り出すことにあった。最初の調査によって次の点が確認された。

- 1) 小さな地方博物館には人的資源が不足している。
- 2) 大きな博物館は資料の展示配列上の問題を抱えている。
- 3) 博物館のない辺鄙な遠隔地では文化的存在が必要とされている。

そして全ての管理部は教育プログラムを組織することに一様に熱意を表明したものの、現実には自力では実現不可能であるとの結論に至った。それゆえ、文化省によってアテネ市の歴史的な中心プラカの一角に教育プログラムセンター (Centre for Educational Programmes/以下 CEP と略す) を設置することが決められたのであった。設立の構想者は当時の文化科学相であった故メルクーリ (Melina Merkouri: 1925-1994) であった。ギリシアではこの CEP の設立を契機としてようやく本格的な教育活動が展開され始めることになる。

3. 文化省教育プログラム課の教育活動

1985年の創立以来、今日まで CEP は教育省と提携して考古歴史に関する教育プログラムを企画実施し続け、さらに博物館教育者自身を訓練する機能をもつ教育活動の中心として指導的立場にある。その実績が評価され、ますます重要性を増してきていることから、昨年1998年より今まで所属していた文化省の先史及び古典古代文化財課から独立して文化省内の一つの課に昇格し、「教育プログラム課」(Department of Educational Programmes/以下

DEP と略す) となった。

この課のスタッフは全員考古学を専攻とする教育者8名で構成されている。教育プログラム課の仕事は博物館や遺跡における教育プログラムを考案・制作し、自らがイニシアティブを取って各博物館や遺跡の学芸員らの協力を得ながらプログラムを施行したり、あるいは課の建物内で行なった教育展示をギリシア各地に巡回し率先して範を示しながら教育活動を啓発することである。また、いまだ人材不足や試行錯誤の段階にある博物館の相談を受けアドバイスをすることもある。活動範囲がギリシア全土に及ぶためエーゲ海地域省や地方自治体との協力関係は不可欠であり、現在のところは各博物館と連携をとりつつ、その中心の核となって教育活動を推進しているが、いずれ地方に小センターを設置し教育プログラムのさらなる促進をはかるという長期的展望プランがある。

教育プログラム課の作成するプログラムの対象は a) 小学校の中学年以上から中学、高校の生徒 (10才~18才)、b) 成人 (大学生以上) に分かれる。学校等の団体に関しては学期期間中に常に2つのレギュラープログラムが準備されているし、個人参加の場合には毎週日曜日の午前中に無料でアテネの遺跡においてプログラムを提供している。いずれも事務所を通して、現在どこでどのようなプログラムが行なわれているかを確認し予約申込をすることができる (団体1グループは10人以上35人まで)。

さて、現在行なわれているプログラム及び過去に行なわれ成功を収めた代表的な活動事例を

- (A) 教育展示
- (B) 遺跡・博物館訪問プログラム
- (C) 特別プログラム
- (D) その他のプログラム

の順に紹介してみたい。

(A) 教育展示 (表1参照)

テーマ1: 古代の文字

第一回展示「文字の誕生」(1985年)

[場所] DEP 展示室

[意図] 古代において文字が誕生して発達した場所 (メソポタミア、エジプト) にギリシアは地理的には近いにもかかわらず、それらを発明した人々や文化

表Ⅰ DEPの教育展示例

【テ ー マ】	古代文字	古代記述	古代劇
【主 な 対 象】	限定なし	小学校3年生	小学校4年生
	*対象主体は学校の生徒であるが、成人も見学可能。 特に日曜日はオープンデーとして展示室を開放している。		
【展 示 内 容】	説明パネル レプリカ パズル、ビデオ等	説明パネル、地図 ビデオ	説明パネル レプリカ、模型 衣装、音楽、ビデオ
【ワークショップ】	古代文字を書く	演劇	——

された劇場は古代の民主主義社会における「デモクラシー」のアイデンティティーの一つであった。政治状況と結びついた演劇上演の歴史現象をテーマに取り上げ、「劇」と「社会」との関連を当時の社会

についてはあまり授業で触れられることがない。また、ギリシア先史時代に存在したミノア時代の線文字A、ミケーネ時代の線文字Bはその後のギリシアアルファベットとは全く異なっており、現在学校で使用されているアルファベットのような簡単な記号に文字が最終的に変化していった過程がいかに複雑なものであるかを認識させるための一助となることを目的とする。

【ワークショップ】「文書の家」と名付けられたワークショップにて楔形文字を学ぶシュメール人の生徒や象形文字を筆記するエジプト人書記に、あるいは倉庫の物品を管理するミケーネ人書記にそれぞれなつたつもりで各文字を真似て書くことが行なわれた。

テーマ2：古代記述と考古学

第二回展示「ホメロスのイリアス—神話と現実—」

【場所】DEP展示室

【意図】ギリシア先史時代のミケーネ時代後期に起つたとされるトロイ戦争を伝える詩人ホメロスの叙事詩「イリアス」の内容が、実際の考古学上の出土品によってどのように証明されているかを具体的に示すとともに、特に小学校3年生で習うミケーネ時代（紀元前16—12世紀）の世界全体のアウトラインを提供することを目的としたものである。

【ワークショップ】トロイ戦争を劇仕立てにした楽しいワークショップが行なわれ、劇中、男子生徒らはホメロスの記述を考古学の発見が証明した品であるミケーネ人戦士の特徴的な「猪の牙のヘルメット」をペーパーワークで作製してかぶり参加の記念とした（写真1）。

テーマ3：古代劇の上演と社会

「古代の劇場と民主政」（1997年～現在続行中）

【場所】DEP展示室

【意図】前5世紀アテネの社会において悲劇の上演

背景に学ぶことを目的とする。学校カリキュラムの関連では、特に小学校4年生が古典期のアテネにおいて民主主義が発達し、ペリクレス(Pericles)の指導の下で黄金期を迎えるという内容を学習する。

DEPは博物館とは異なって「実物」の資料を持つてはいない。そのためDEP展示室で行なわれる展示にはレプリカが多く代用されるが、これは決してマイナスとばかりも言えない。何故ならば、資料の保護の問題から生じる制約が一切ないフリーなプログラムが企画できるということと、子供達に伸び々と自由に展示物に触らせることができるというメリットがある。子供の側からすれば、興味のあるものに触ってはいけないといった堅苦しい雰囲気がないため、親近感をより抱くことにつながっていると思われる。加えて体験型のワークショップを設けているのも子供達に知識だけでなく楽しい思い出を与えようとする配慮の表われである。

(B) 遺跡・博物館訪問プログラム

次に、特定の考古学遺跡及び博物館で行なわれた



写真1 トロイ戦争の有名な「トロイの木馬」の前でミケーネ人戦士に扮した子供達。

プログラムであるが、施行にあたっては歴史教育に重要な区域を選定し、その場所で特定の歴史現象を追体験させることに主眼が置かれている。その中で特に成功を収め、示唆に富むザクロス(Zakros)の一例を見てみよう。

「ザクロスのミノア時代の宮殿の一日」

【場所】クレタ島東部ザクロス宮殿遺跡(写真2)

1988年にクレタ島東端部のシティア(Siteia)の管理部とシティア市の協力を得て施行された。

【対象】ザクロス村の小学生全学年生徒45人(6才～12才)

【意図】このプログラムは文化的娯楽の存在が必要とされている遠隔地の子供達を対象として考案されたものである。施行にあたっての目的は二つあった。農業主体の辺鄙な村落であるザクロスは文化的娯楽に欠けている村であり、ゆえに、一つの目的はそこに住む子供達に何か文化的な楽しみを与えることであった。そして二つ目は自身の所属する地域社会の文化遺産に親しむことにより、その価値を再認識させるということであった。このザクロスという村は、ミノア時代の有名な宮殿遺構(紀元前1900B.C.)からわずか7km程離れた所に位置しているにもかかわらず、住民の文化遺産に対する関心はかなり低いという状況が背景としてあった。

【内容】3日間のプログラムの内容は次のようなものであった。初日にミノア時代の人々の宮殿での生活の様子を説明やスライドで予備知識を与え、翌日には実際に宮殿遺跡を訪見し、各自がミノア人になって割り当てられた役(王様、商人、役人、書記、神官など)を演じながらその時代の特徴的な土器や粘土板文書のレプリカを使用し、歌や踊りも含んでその生活ぶりを再現し体験する(写真3)。最終日にはシティア考古学博物館を訪れて本物の出土品を見て

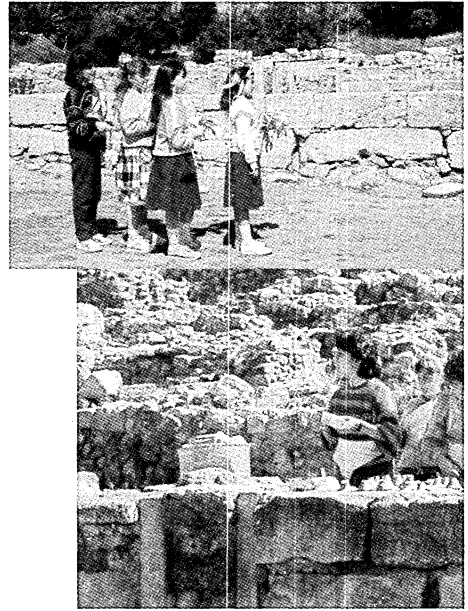


写真3 (上)宮殿の女官を演じる女の子達。
(下)古代の土器のレプリカを使用する。

確認しプログラムは終了した。

【成果】このプログラムを通して子供達は地面の下から遺物が出土するのを見たり触ったりしたいと興味を示すまでになり、多くの子供達がこの貴重な体験を喜びの内に絵や文に託してその心情を綴った。中には博物館の主任学芸員宛に感謝の思いを書いた子供もいたという。結果としてこのプログラムは当初の二つの目的を果たし成功を収めることができたのであった。

【補記】プログラムを受けた子供達全員が卒業し終えたら、新しく入学してきた子供達にこのプログラムは継続して行なわれる予定であるという。したがって6年に1回施行されるプログラムとなっている。

その他に、古代ギリシアのデモクラシー誕生の場所古代アゴラ(広場、市場の意)とその博物館においてデモクラシーの現象を追体験することを求めたプログラム「古代アテネの公的生活」(写真4)、ケラミコス(Kerameikos)にて行なわれた環境教育をテーマにした古代の失われた自然と古代遺跡について考えるプログラム「失われたイリダノス川を探して」、ローマ時代の広場で古代人がどのように時を計測し暮らしていたかを学ぶ科学プログラム「アンド

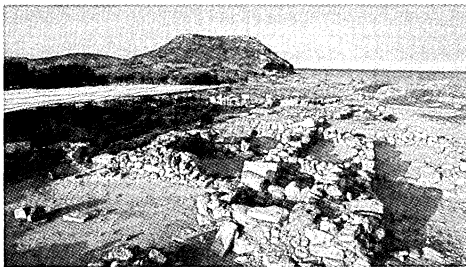


写真2 ザクロスのミノア時代の宮殿遺跡

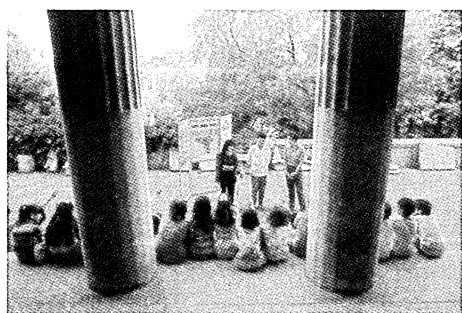


写真4 古代アゴラ博物館の前でインストラクターの問かけに活発に答える子供達。

ロニコス(Andronikos)の測時器」等がある。

DEPのプログラムの特徴は毎回、歴史的視点からかなり限定された1つのテーマを取り上げ、それを体験型学習のアプローチで提供していることである。ヴァエティーに富みながら、しかも意図や視点が常に明確で質の高いプログラムであると評価できよう。

(C) 特別プログラム

その他に特別な必要のある子供達へのプログラムとしては主に次の3種類のプログラムがある。身体及び精神的に障害のある子供達や正規の学校教育を受けていない子供達、そして遠隔地の子供達を対象としたもので、いわゆるアウトリーチと呼ばれるものである。

障害児に関しては引率責任者との共同作業で行われている。遠隔地へは国の最遠隔地までサービスがいきわたるようにとの配慮からアフリカで行なわれた事例を参考にして考案された巡回博物館バス「キボトス」(Kibotos)を走らせた。「キボトス」は1993-95年の学期期間中にトルコ寄りのエーゲ海東端に位置するレスボス島(Lesbos)、リムノス島(Limnos)に送られ、中学生を対象にした授業の中で、あるいは島内の考古学遺跡で、地図、年表、考古学展示物のレプリカ、印刷物、スライドの入ったミュージアムキットが教材として使われ実施された。プログラムの内容は若い世代に対して自身の住む地域の歴史及び文化遺産の価値を認識させるとともに又、その保護についての意識を啓発する意図で企画されたものであった。

さらに、ここで教育の機会が何らかの理由によっ

て阻まれている子供達へ施行されているプログラムに少し注目してみたい。

ここ数年の間にギリシアでは難民、移民、ギリシア系帰国民が増え、異文化をもつ住人との共存という面で徐々に社会的影響が現われ始めている。こうした現実を見据えてDEPは1994年から社会的統合の一つの手段として「文化」をもって多様な人口集団へアプローチを開始した。最初の教育的介入の対象として選ばれたのはアテネの中心地域に住むイスラム系家族の子供達であった。彼等は北ギリシアのスラキ地方(Thrace)西部から来たイスラム系マイノリティーである。子供達の大半は学校へ行かず、路上で花を売ったり、車の窓ガラスを拭いたりして働き家計の一部を支えている。ギリシア語でも母国語でも文盲であり、そのため社会の周辺的存在となっている。

プログラムは教育上の特別な必要性一識字—toに合わせて作られてはいたが、何よりもまず彼等の文化的アイデンティティーを尊重しつつ、同時に彼等が現在住んでいる国の文化に自分自身から能動的に興味を示し触れていくようになる契機を与え、さらに集団の創造活動の輪の中で読み書きの能力を拡大することを目的としていた。このことによって彼等を社会に近づけようとしたのだ。アテネの主だった博物館や遺跡で実施されたプログラムは、文字、宗教、音楽&ダンス、衣装&仮面、陰絵芝居(カラギョーシス: Karaghiozis)⁽²⁾をテーマとしたものや、陶器の作製や古代の時について学ぶなど多岐に渡っている⁽³⁾。

(D) その他の活動

DEPの活動は国内にとどまらず、ギリシア国外にも及んでいる。展示を受け入れてくれる外国の博物館、特にギリシア人コミュニティを抱える都市と提携して行われている。これらのプログラムの目的は外国の地方の子供達やギリシア系移民の子供達をギリシア文明に接触させようとするものである。

以上、4項目にわたって文化省教育プログラム課の主な教育活動を述べてきたわけであるが、その他に博物館における教育活動を全体的な立場から推進しているもう一つの機関、ICOMギリシア委員会の取り組みについても言及しておきたい。

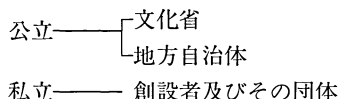
学校の子供達が博物館に親しんでくれるように教育省、文化省と共同して教育プログラムの遂行に貢献してきた ICOM ギリシア委員会は「教育と文化活動のための国際委員会」(International Committee for Education and Cultural Action/CECA) という組織をもっている。ここでは DEP を初めとして ICOM であるメンバーが月に一度意見交換や現状報告をし合い、互いに連携を取り合っている。特に 1988 年からは「博物館と学校」(Museum-School) という教育者向けの啓発的なシンポジウムが年 1 回地方で行われるようになっており、そこではプログラムの実践報告や具体的なアイデアの交換が行われ、年々活発化してきている。

4. 考古学博物館による教育プログラム

それでは、考古学博物館独自が行なっている教育活動を見ていくことにする。

ギリシアの特徴として博物館の中では考古学博物館の割合が一番多く、400 近く数える博物館の約半数を占め、その数は 101 館、コレクションは 61 となる (1998 年 10 月、文化省考古学博物館課掌握)。次いで民俗芸術博物館、ヴィザンチン博物館が続き、これらの 3 種類がこの国の主要な博物館である。

博物館の運営管轄区分は以下ようになる。



考古学博物館は私立を除くと全てが文化省の管轄下にあり、ギリシア全土を管轄地域ごとに区分した先史及び古典古代遺物を管理する管理部によって運営されている。各管理部の基本的な活動内容は管轄区域における発掘調査と報告、遺跡の保存、出土遺物の調査、登録、修復、展示、保管からカタログ等の作成、シンポジウムの開催、そして近年活発化してきている博物館や遺跡における教育プログラムの考案実施と実に幅広い。管理部で働く考古学芸員がこれらの活動を推進しているのだが、彼等は欧米のシステムでいうところのキュレーター (Curator) に相当し、教育活動専従のエデュケーター (Educator) が存在するわけではなく、各博物館に 1 人ないしは 2 人程度の学芸員が自らの専門職務とは別に教育活動を兼務し担っているのが現状である。設立当初か

ら教育普及部門を独立して持っている首都アテネのごくわずかの館でさえ、教育普及課の責任者以外に特別な専従スタッフを抱えてはおらず責任者自身が教育活動の実質的な担い手でもある。

首都アテネには考古学に関係した館は 9 館あるが、そのうちほとんど全館において教育プログラムが提供できる態勢を整えている。教育普及活動において際立った活動を展開している 2 つの館、アクロポリス研究センター (Acropolis Study Centre)⁽⁴⁾ 私立博物館のキクラデス芸術博物館 (通称グウランドリス博物館) はどちらも開館当初から教育課が設置されており、博物館活動において教育普及活動を重視していたことがうかがえる。それ以外にも独自に教育部門を設けて教育プログラムを提供している館に貨幣博物館と碑文博物館が挙げられる。また、確立された教育部門はないが、国立考古学博物館と戦争博物館は必要があれば予約制で学校グループ向けの説明ガイドを行なっているし、古代アゴラ博物館 (Museum of Ancient Agora/別名 the Stoa of Attalus) とケラミコス博物館 (Archaeological Museum of Kerameikos) では DEP がプログラムを提供して施行している。

地方博物館に目を転ずると、動向として一昨年あたりから教育活動に取り組み始めた博物館の数が増えてきており、中でも優れた教育展示を行なっている北部ギリシアのディオオン考古学博物館 (Archaeological Museum of Dion) や地元の考古学の話しを子供達にもわかりやすい童話にして博物館内で人形劇を行なうというユニークなプログラムを提供した中部ギリシアのテーベ博物館 (Archaeological Museum of Thebes) 等が注目される。こうした地方における教育活動が次第に活発化してきて、都市にはない地方独自の個性を発揮した質の高いプログラムが今後でてくるであろうことは予想されるが、大半の地方博物館がようやくここ数年の間で教育活動に着手し始めたばかりで現段階では手探りの状態にある。

ここでは代表的な 2 つのアテネの考古学博物館の教育活動の事例を取り上げ、特に教材とプログラムの形態の側面に焦点をしばって見ていきたい。

(1) 先導的役割を果たす貨幣博物館

(Numismatic Museum)

〈館の特色〉

この館では紀元前7世紀から現代に至るまでのコインが展示保存され研究されている。そのコレクションは大変素晴らしく、世界的にも有名で世界の権威ある5つの館の1つに数えられている程であり、貨幣を専門に手がけるギリシアで唯一の博物館である。出発点となった1829年から住居については転々として紆余曲折を経てきたが、構想されていたように永住の住処となるイリウ・メラスロン⁽⁵⁾ (ILIOU MELATHRON/ドイツ人考古学者シュリーマン (Heinrich Schliemann) の旧邸宅) に居を移し(写真5)、昨年12月に再オープンし、多くの来館者を集めている。

〈教育パンフレットの活用〉

この館は公立の博物館の中でも1984年というこの国においては早い段階から教育活動に関心を示し、教育プログラムを組織して1987年から実験的に開始し、その翌年から連続して施行し軌道にのせている。プログラムの対象は主に11才~14才までの小中学生だが、その他に幼稚園児や大学生、さらには海外帰国子女にも適用されている。

一番最初に企画されたプログラムは「古代ギリシアの貨幣」であったが、現在では「ヴィザンチン貨幣」「ヴィザンチン時代の鉛の印章」が加えられている。プログラムは体系立った以下の内容の三部構成となっている。導入部としてa)「貨幣とは何か」といった貨幣の説明で始まり、b) 補助的な教育パンフレットを使いながら基礎知識を与え、合間に教育

的ゲームを取り入れ、最後にc) インタビュー形式で学んだことの確認と整理が行なわれ終了する。導入部→実践展開→整理統合の基本的なパターンである。最初の導入部分はクラスのレベルや参加集団の関心に合わせてその都度内容が個別に作成される。プログラムのメインとなるのは第二部のb) で実際の貨幣を展示したケースの前で行なわれる。ここでは子供達の自発的な参加が要求され、楽しい創造的な学習を目的として工夫考案された館独自のパンフレット及びその中に付された教育ゲームが効果をあげている。

例えば、最初に作成されたパンフレット「古代ギリシアの貨幣」を例に挙げると、この中では貨幣に関する単なる事実のみを伝えるやり方ではなく、まず、コインの図像に子供達の関心を引き寄せる努力をしている。例えばコインにはギリシア神話の登場人物や建物が描かれていること、また、オリンピアやデルフィ等の祭典で行なわれた古代ギリシアの様々なスポーツが描かれていることをクローズアップする。その後も「探究と発見」と題した項目で展示されているコインの図像の中に植物や動物(花、葡萄、蛙、亀等)を見つけるように導く。「今と昔」という箇所では古代と現代のコインの比較が行なわれ、そこでギリシアの貨幣単位であるドラクマ(drachma)の時代連続性を理解させ、子供達にとって身近な貯金箱の例を通して古代における貯蓄と現代のそれとの比較を行なっている。

遊びのある教育ゲームには「クロスワード」(コインとか宝、ドラクマといった貨幣に関する言葉が隠されている)、「ミステリーピクチャー」(展示コインの図像に描かれた動物を識別する)、「隠された財宝を探そう」等がある。さらにコインに刻まれている古代ギリシア語の文字を読むことに挑戦する部分が設けられており、子供達は率先力を養う。パンフレットの最後には自分自身で考案したコインを描くページがあり創造性が刺激される。このようにパンフレットにはこの館の教育上の努力が全て集約されているのである。

展示としてのコインはある種特殊なものであり、プログラムを立案する際にアプローチが難しい。しかもギリシアには参考とすべき同種の館が他に存在しないことから、当初はプログラムやパンフレット

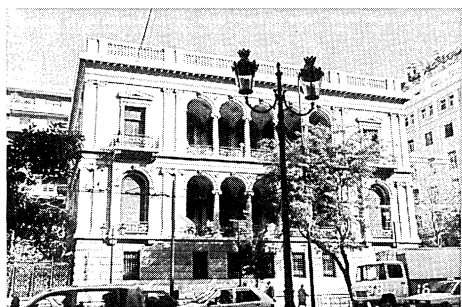


写真5 昨年12月にオープンしたアテネのパネピスティミウ通りにある貨幣博物館。2階の窓の上の壁に「イリウ・メラスロン」と刻まれているのが半分見える。

作成にあたっての準備はかなり大変であったという。この館の教育的配慮は企画立案された教育プログラムのみならず、館内常設展示にもうかがわれる。子供達にもなるべくわかりやすい展示物への理解を助けるような展示、配置を常に心がけることで貨幣理解への難しさを克服できると考えて取り組んでいる。

(2) 学校との連携を深めるキクラデス芸術博物館 (Museum of Cycladic Art)

〈館の特色〉

この館は海運王であったグウランドゥリス(Nikolas P. Goulandris)の個人コレクションを収めるために1986年に建設された私立の博物館である。そのため別名グウランドゥリス博物館と呼ばれるが、主に紀元前3千年期にキクラデス諸島に開花したキクラデス文明を始め紀元前4世紀までの古代ギリシアの芸術品を収集している。この館に展示されている物品はこの国の5千年以上の歴史文化を代表するものであるが、特にキクラデス文明芸術に特有の大理石製小偶像のコレクションは有名である(写真6)。建物内には展示室以外に教育レクチャーやカンファレンス用の空間(3階)と子供のためのワークショップルーム(地下)があり、活発に教育活動に使用されている。

〈学校への積極的な働きかけと活発な訪問プログラム〉

学校の生徒のために企画された教育プログラムは設立開館当初の1986年からすでに始まっていた。学

校の生徒達を博物館に招き、直接古代文明との創造的な触れ合いをしてもらうことを意図して作られたのが訪問プログラムである。訪問プログラムでは主に常設コレクションを題材としたレギュラープログラムが施行されている。休館日を除いて平日の午前中(10:00-13:00)の間は約30分ごとに教師に引率された学校のグループが次から次へと訪れ、大変にぎやかな光景が展開される。こうした訪問の予約は事前に教育課と連絡の上、日程と参加プログラムが決められるのである(最低10人から)。

プログラムの対象は小学校3、4年生と中学1年生である。これは本稿の冒頭で述べた通り、学校の授業カリキュラムに合わせて企画されている。また、中学校の上級クラスや高校については教材の貸出が行なわれている。

現在行なわれているプログラムは以下である(*全て各学年共通)。

「キクラデス文明」

「古代の陶工」

「ギリシア神話と陶器画」

これらのプログラムは次の手順で行なわれる。館専属のボランティア・インストラクターが導入的なスライド上映や説明を最初に行ない、その後質疑応答を経て理解を確認した上で、子供達にパンフレットと板を手渡す。子供達はそれらを手にして展示ケースへと向かう。

この館でも先に見た貨幣博物館と同じく教育パンフレットが活動の中心を占める。日本の博物館によく見られる館内に設置してあるレジュメ形式の利用者向けワークシートと基本的にアイデアは同じだが、この場合はプログラムのテーマコンセプトに沿ってコンパクトに作成された1冊のテキストブックとなっている。中身は大切な基礎知識の文章、きれいな挿絵や写真、問題出題、クイズやゲームで構成されている。また、同じテーマを扱いながらも各学年のレベルに応じて内容を変えて作成しており、この館のパンフレットは種類が実に豊富である。

さて、子供達はパンフレットに書かれてある順序に従って各展示ケースを観察し、質問の答えを展示物の中に発見して書き込んだりする。インストラクターと引率の学校教師らは、生徒達が正しく実物を確認するのを助けたり、質問を受けたりできるよう

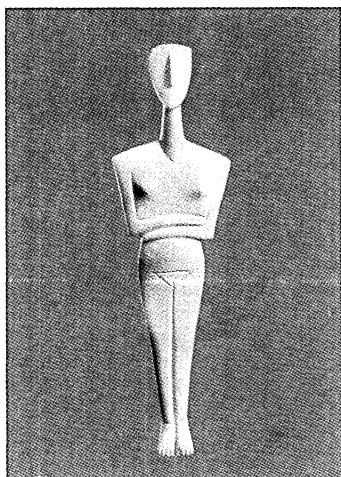


写真6 大理石製の小偶像

に傍にいる(写真7)。パンフレットに従った学習作業が終了するとそのまま解散となっていくが、使用したパンフレットは訪問の記念として各自持ち帰り、学んだ知識をその後も振り返ることができるようになっている。教育パンフレットの作成に重点が置かれている理由が改めて理解されるのである。

このように訪問プログラムは活発に機能し、ギリシア全土の学校から次々と訪問グループが訪れているわけだが、博物館を訪れるチャンスに恵まれず、上記のような訪問プログラムを受けることができない場合に対応したもう一つの教育サービスがこの館では用意されている。

「学校が博物館に来ないのならば、それでは博物館が学校へ行く」とはこの館のスローガンであり、そのポリシーのもとに考案されたのが貸出教材のミュージアムキットである。学校から学校を旅するこのトランク(写真8)は博物館の世界を子供達や教育者達にもっと身近に感じてもらい、見たり聞いたりするだけではなく触ることを通して学んでもらいたいとの目的で製作されたものである。各キットにはそれぞれ異なったテーマがあり、展示物のレプリカ、スライド、写真、本、教育ゲーム等が入っている。教師は学校の授業の中で生徒の実情に合わせてふさわしいと思う方法でこれらを使うことができるし、生徒達の積極的な参加も促すことができる。

この館では学校の学期開始の初めに初等中等教育者向けの説明会を企画し実施している。その目的は学校と博物館との間に柔軟な関係を築くことにある。教育者自身が博物館のコレクションを見学し、教育プログラムや貸出教材の解説を受けながら自分の学校の授業に取り入れることを考えていくのである。

この館の教育活動の基本姿勢には内(博物館)と外(学校)に橋を架ける、すなわち展示物(古代文化)と子供達との交流の場を積極的に設けようとする姿勢が強く表われている。主役はあくまで子供達と展示物であり、それを陰でこの館の教育課と学校の教師達が支えているのである。

おわりに

本稿ではギリシアの考古学博物館における教育活動の現状を述べ、実際の代表的な教育プログラムの

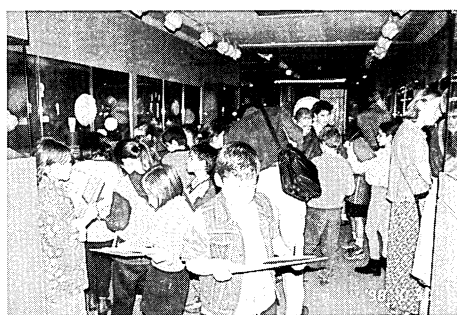
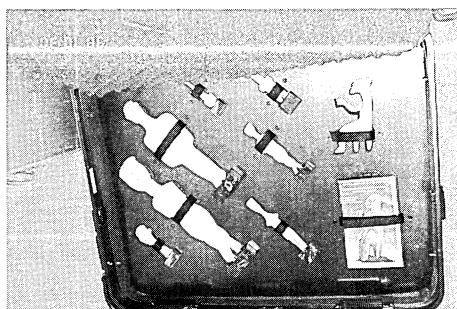


写真7 キクラデス芸術博物館での教育プログラム「キクラデス文明—私の友達、土偶たち」(小学校3年生)の一コマ。



写真8 キクラデス文明のミュージアムトランク。



事例をいくつか紹介してきた。まとめとしてその特徴を以下の点に整理要約することで本稿の締めくくりとしたい。

- 1) 現在行なわれている考古学博物館における教育プログラムは主に小中学校の生徒を対象としたものが中心であり、それはこの国の歴史授業カリキュラムの編成に由来する。
- 2) 教育プログラムの施行方法は実物に直接触る機会を与えることを基本とし、視覚・聴覚・触覚にわたる触れ合いを目指す。

3) 教材作製には力が注がれており、特に教育パンフレットの利用が効果的と考えられ重視されている。その他にミュージアムキットなどレプリカを通して得る視覚・触覚上の疑似体験を追及したものも多い。

4) 演劇、歌、ダンスなどを取り入れた娯楽の要素のあるワークショップが随所に見受けられ、「知」と「享楽」のバランスを取ることが試みられている。

筆者の今後の課題としては次第に活発化してきた地方博物館における教育活動をも視野に入れながら、「学校」と「博物館」との連携を中心に観察を加えていきたいと考えている。

〔註〕

1) 1998年度の時点で学校で行なわれている教育省によるカリキュラムについては以下を参照とした。

ΕΦΗΜΕΡΙΣ ΤΗΣ ΚΥΒΕΡΝΗΣΕΩΣ ΤΗΣ
ΕΛΛΗΝΙΚΗΣ ΔΗΜΟΚΡΑΤΙΑΣ 1987, 1989,
1995, 1997.

2) トルコ語の Karagoz (「黒い目の」という意味) に由来する。切り絵による影絵人形劇で、人物や物などを切り抜いた部分に色セロファンを張りスクリーンの後ろからライトを当てて行なわれるものである。ギリシアの伝統的な遊びの一つである。

3) このプログラムはヨーロッパ委員会 (European Commission-Directorate General XXII-Education, Formation and Youth) によって支援されている。

4) このセンターの教育活動については1996年に大阪で行なわれた国際学術シンポジウム「都市と文化財—大阪とアテネ—」開催の折に、教育課責任者ハジアスラニ (K. Hajiaslani) 女史も来日され、センターの教育活動について講演をされた。同時に大阪市立博物館にて「世界文化遺産—アクロポリス展」と題する特別展示が行なわれ、その会場の一画で女史により育プログラムの一端 (ミュージアムキット「古典期建築のスタイル」) が紹介され (写真9)、来館した小学校の児童らに施行されたことは記憶に新しい。尚、昨春シンポジウムの内容が刊行され (コーネリア・ハジアスラニ

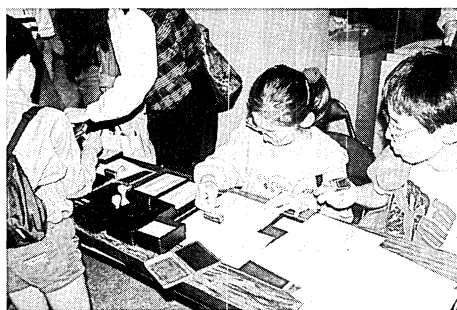
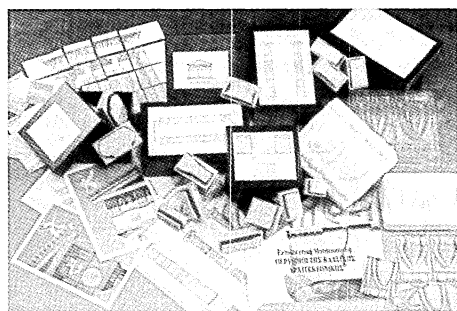


写真9 (上) ミュージアムキット
「古典期建築のスタイル」
(下) このキットで遊ぶ子供達
(「世界文化遺産—アクロポリス展」にて、
大阪市立博物館)

写真提供/大阪市立大学

(1998)『アクロポリス文化財による教育』(関隆志編「都市と文化」—アテネと大阪—大阪市立大学国際学術シンポジウム1996、PP.268-278所収、東信堂)、センターの教育活動は詳しく掲載されている。

5) 建物の外壁に「イリウ・メラスロン (ΙΛΙΟΥ ΜΕΛΑΘΡΟΝ) (「トロイア宮殿」の意)」と刻まれているためにそう呼ばれている。

〈参考文献〉

- 守井典子 (1997)『博物館教育論』(大堀哲編著「博物館教程」第6章所収) 東京堂出版。
- 水藤 真 (1998)「博物館を考える—新しい博物館学の模索」山川出版。
- ロラン&フランソワ・エティエンヌ (1995)「古代ギリシア発掘史」(青柳正規監修) 創元社。
- C. M. Woodhouse (1973), Capodistria: The Founder of Greek Independence, Oxford

University Press.

- A. Κόκκου (1977), Η Μέριμνα για τις Αρχαιότητες στην Ελλάδα και τα Πρώτα Μουσεία, ΕΡΜΗΣ, ΑΘΗΝΑ.
- A. Gazi (1994), Archaeological Museums and displays in Greece 1829-1909: A first Approach, Museological Review 1-1, pp.50-69.
- Γ. Σταΐνχαουερ (1997), Το Αρχαιολογικό Μουσείο, ΑΙΓΙΝΑ, ΕΠΤΑ ΕΜΕΡΕΣ, ΚΑΘΗΜΕΡΙΝΗ-ΚΥΡΙΑΚΗ, 7 ΣΕΠΤΕΜΒΡΙΟΥ, σ.16, 22.
- Σ. Κοκκίνη (1979), Τα μουσεία της Ελλάδας, ΕΣΤΙΑ, ΑΘΗΝΑ.
- ICOM ΕΛΛΗΝΙΚΟ ΤΜΗΜΑ (1991), Ίδρυση, Οργάνωση και Λειτουργία Εκπαιδευτικών Τμημάτων σε Μουσεία, ΠΡΑΚΤΙΚΑ CECA 88 (Ναύπλιο-Αθήνα 9-6 Οκτωβρίου 1988).
- Σ. Χρυσουλάκη (1995), Δώρο Ασημένιο Ποίημα ή ο Κοινωνικός Ρόλος του Μουσείου, ΑΡΧΑΙΟΛΟΓΙΑ, τεύχος 57, σ.82.
- Ε. Πίνη, Ν. Σελέτη (1994), Η Κιβωτός περιοδεύει στη Λέσβο και τη Λήμνο, ΑΡΧΑΙΟΛΟΓΙΑ τεύχος 50, σσ.100-101.
- CEP (1996), Culture as a means of social integration-an intercultural approach; CEP (1997), Culture as a means of social integration-an intercultural approach, time.
- Μ. Οικονομίδου (1989), ΝΟΜΙΣΜΑΤΙΚΟ ΜΟΥΣΕΙΟ, ΤΑΠ, ΑΘΗΝΑ.
- ΤΠΤΟΡΓΕΙΟ ΕΘΝΙΚΗΣ ΠΑΙΔΕΙΑΣ & ΘΡΗΣΚΕΥΜΑΤΩΝ, ΤΠΤΟΡΓΕΙΟ ΠΟΛΙΤΙΣΜΟΥ, ICOM ΕΛΛΗΝΙΚΟ ΤΜΗΜΑ (1994) Μουσείο-Σχολείο 4^ο Περιφερειακό Σεμινάριο (Ιωάννινα Πανεπιστημιούπολη, 2-3 Δεκεμβρίου 1994).
- (1997) Μουσείο-Σχολείο 5^ο Περιφερειακό Σεμινάριο (Καλαμάτα, 4-6 Απριλίου, 1997).
- Μ. Πλάτη (1991), Μουσείο Κυκλαδικής

Τέχνης, ΑΡΧΑΙΟΛΟΓΙΑ τεύχος 38, σσ.5-10.

*尚、人名、地名、その他の固有名詞に関しては本文中ではギリシア語表記でなく、英語表記に統一した。

[謝辞]

本稿を作成するにあたって、ICOM ギリシア委員会の委員長ハジニコラウ女史、ツィルー女史には数々の助言を頂いた。文化省教育プログラム課の副ディレクター、ピニ女史をはじめとして、アクロポリス研究センターの教育課ディレクター、ハジアスラニ女史、キクラテス芸術博物館の教育課ディレクター、ブラティ女史らは快く取材に協力し有益な資料を提供して下さいました。これらの方々に感謝を捧げたい。また、写真資料を提供して下さいました大阪市立大学事務局、個人的にお世話になった鳥取県倉吉市立倉吉博物館の主任学芸員根鈴輝雄氏に改めて謝意を表したい。